

今年度第4回目となる外国語活動・外国語の研究授業を 兵藤 魁 教諭が行いました。新型コロナウイルス感染症対策のため体育館で行いました。協議会では、中間指導や児童理解について活発な意見交流を行いました。指導・講評では、文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生よりご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成

～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者:6年3組 担任 兵藤 魁 教諭

単元名:Unit 4, Lesson 2 単元名 Summer Vacations in the World. 夏休みの思い出

輪郭指導講評:文部科学省初等中等教育局視学官 直山木綿子 先生より



〈研究経過報告〉

① エンドプロダクトの提示

・兵藤教諭の姉のフランス人の友人に日本の夏休みについて伝えるということをエンドプロダクトとして設定した。夏休み前にフランスの友人に出演してもらった動画を見せ、児童が自分が過ごした夏休みの何を紹介したいか考えられるようにした。

② 表現の導入の工夫

・湊江小では、以前から先生方の動画を使って、表現の導入を行うことが多く行われてきた。今回は、元担任と現担任とのやり取りを見せることを表現の導入として活用した。インタビュー形式で元担任の先生に出演してもらい、子供たちとLIVE感を楽しみながら、さらに知りたいことを質問できるようにした。

〈授業者自評・兵藤先生〉

・頑張って準備をしたが、外国語の授業の難しさを改めて感じた。子供たちはとてもよくがんばっていた。今日の協議会で学んだことを活かして、これからよりよい授業をしていきたい。

〈研究協議会〉

【良かった点】

- ・温かい雰囲気の中で授業が行われていた。
- ・児童の発言に対し、Nice, Goodと英語で教員が温かく受け答えをしていたことがよかった。
- ・児童が英語で何とか伝えようとしていたことがよかった。
- ・スマールトークの中で、既習事項を使って、児童が質問をしていたことがよかった。

【改善できるポイント】

質問 この単元で、どういった力を付けさせたかったのか。

授業者→エンドプロダクトに向けて、It was . I went to . I enjoyed . I ate .の表現を言わせたい、聞き取らせたい、注目させたかった。

- ・段階を踏まえて進めていかないと子供たちが自信をもって言えていないのではないかと。これまでの表現に慣れ親しむことが不十分で、戸惑っている子も多く見られた。
- ・エンドプロダクトを児童に提示していたが、明確に伝わっていないように感じた。
- ・何のために、どんなことを伝えたいのか、児童が考えられるようにエンドプロダクトを提示することが必要である。

質問 中間指導の際、児童の質問で「何をしたんですか」を聞きたいと質問があった際、「What did you enjoy?」をもっていった。「何をしたんですか」を「何を楽しんだんですか」に変えてしまったのはなぜだったのか。

授業者→変えた意識は無いが、「What did you enjoy?」をもっていきかかった。

- ・児童が言いたかったことは「そこへ行って何をしたのか」what did you do? から enjoyed へと子供が聞きたいことを解決させてから繋げる流れで進めるとよいのではないかと。
- ・元担任へのインタビューでせっかくその場において、質問できるのに児童からの質問がなく残念だった。
- ・児童の中で質問がでないこともあるが、それをそのままやり過ごすのではなく、アドバイザーや担任が質問をして、どんなふうに聞いたらよいか例を示したり、質問がしやすい空気を作ったりするのも大事である。子供たちが推測できるように、質問などで補えば、先の活動にも繋がられたのではないだろうか。

〈指導・講評:文部科学省初等中等教育局視学官 直山 木綿子 先生〉

- ・流れがとてもよかった。研究してきたことをしっかりとやろうという気持ちが伝わってきた。頑張りが見えた。
- ・先輩の先生が補っていた。チームワークがよかった。
- ・教師と児童の会話から教師とAD、そして、教師と子供と会話を広げたところがとてもよかった。

児童:I went to Disney Land.
 教師:Do you like Disney Sea?
 児童:Yes I do.
 教師:Which do you like ? Disney Land or Disney Sea?
 AD:I like Disney Land.
 他の児童に教師が Which do you like? Disney Land or Disney Sea?

【エンドプロダクトの提示の仕方について】

単元の目標で「外国の人に」とあるが、児童にとっては、なんで伝えないといけないの?となる。日本の夏休みを伝えるためにだったらガイドブックで済む。日本の夏休みを頑張って伝えるぞとやる気になる仕掛けが必要である。担任の姉さんの友達が日本に友達を連れて来たいと思うように日本の夏休みを伝えよう、ガイドブックに書いていない日本の良さを知ってもらって日本に来たくなるように「僕らにしか知らないことを教えてあげよう」などとエンドプロダクトを提示する際に伝えることで、子供たちが頑張るぞと心を揺れ動かすようなものにするとういのではないかと。

【中間指導について】

中間指導は、積み重ねが必要である。中間指導の意図を教師がもち、子供たちのやり取りのレベルが上がって行くようにしていくことが大切である。児童の様子をしっかりと観察し、何が必要なのかを考えて取り組むことが必要である。今回、言い方がわからない児童も見受けられた。児童がどう聞けばいいのか、どう答えればいいのかわからない状況のまま進めるのではなく、担任と子供たちとの掛け合いをたくさん行っていく中で、子供たちも理解して自信をもって言えることに繋げていく。

【英語を使って授業を進める】

内容を振り返る際には、英語を使って、聞こえたことを確認すればよかった。例えば、〇〇先生は、どこへ行ったのですかと日本語で確認するのではなく、「〇〇先生 went to ~」と教員が言い、~の部分を見童に言わせる。そうすることで、何度も聞いたり、言ったりするだけでなく、文の構造に気付かせることができる。

子供が見てイメージできることをわざわざ訳す必要はない。先生が焦って答えをあげない。音と意味が後で、子供たちは心配をしなくても理解できるようになる。自分が心配だから答えをあげてしまう。でも子供はできるので心配はいらない。子供たちと一緒に勉強することに意味がある。

- ・児童の名前、名前の呼び方は、外国語だけ first name で呼んでいることがあるが、日本の文化の中で外国語教育を展開したいと考えている。名前を大切にしたいと考えるため、呼び方はそのままの名前で呼ぶのが適切であるのではないかと。